

## はじめに

**平田 光司**

hirata@soken.ac.jp

本レクチャー代表者

総合研究大学院大学葉山高等研究センター 教授

---

本書は3年連続の講義シリーズ「科学における社会リテラシー」の第2回目にあたる、総研大湘南レクチャー「科学における社会リテラシー2」の講義録です。2004年8月2日（月）から8月6日（金）まで総研大葉山キャンパスで行われました<sup>1</sup>。

これまで科学研究は、社会とは切り離された「自立した」行為としての側面が強調され、科学が社会の中で行われるものであることは自明のこととして、特に意識されていませんでした。しかし、科学研究に多額の予算（税金）が必要となってきたこと、科学が社会に利益だけをもたらすのではなく、負の側面も無視できなくなってきたこと、などの理由から、社会との関連性を意識せずに科学研究を進めていくことはできなくなりつつあります。一人ひとりの研究者がこのことを自覚するだけでなく、科学研究体制の中にも社会との関連性を反映させていく必要があるでしょう。

本講義シリーズは、科学と社会の関係について、科学者および科学者集団が持つべき知識をまとめ、将来のコース・カリキュラムとして試行するものです。毎年2単位の大学院講義を行い、3年間で完結するものを目指しています。毎年、以下の3つの軸で構成されています。

---

1 2003年度の講義録は、「科学における社会リテラシー1」総合研究大学院大学（2004）にまとめられている。

### ①科学原論

科学の基本的理解を深めるためのセッションであり、科学とは何かを考える上で不可欠の分野です。具体的には、科学社会学、科学哲学、科学史などが含まれます。

### ②科学政策

科学も政治システムの中に存在している以上、科学政策についての基本的な理解は必要です。また場合によっては、科学政策に対して積極的に発言していく必要性もあります。

### ③科学と社会のコミュニケーション

科学ジャーナリズムを含めて、情報の共有という観点から科学と社会の関係のあり方を考えるものです。

平成15年度「科学技術の振興に関する年次報告」（科学技術白書）では、科学の負の側面にも相応の配慮を示しています。第1部「これからの科学技術と社会」では第1章、第2章、第3章がそれぞれ、大体、「科学原論」「科学政策」「社会とのコミュニケーション」にあてられています。こういう問題を扱うとすれば、似たような構成になるのでしょう。

この講義シリーズは、科学技術社会論学会に協力していただいています。